

白灯台での思い出

瀬戸内町立秋徳小学校 五年 盛 亜衣実

海を守る妖精と出会ったなんて、毎日家族のように接している仲良しな友達でも、きつと信じてくれないだろうと、さとしは思う。

夏休みに入っすぐのころだった。秋見海岸の栈橋。いつも白灯台の下に座って、朝から夕方までつりをする少女がいた。「つりする少女」集落の人々はそう呼んでいた。

となりの佐知山集落に住むさとしは、よくつりに行く。青色のぼうしに、Tシャツと短パン。漁師のお父さんとおそろいのスリッパ。

今日は、秋見の白灯台に出かけた。うわさで聞いていた「つりする少女」が座っている。背中までのびた髪と青いワンピースに青いサンダル。歳はさとしと同じぐらいか。

「うわさは本当だったんだ。」

さとしは、少女のそばに座った。そこが、もともとお気に入りのつりの場所だからだ。頭を下げてとなりに座ると、少女が話しかけてきた。

「あなた、つりが好きなの。」

「う、うん。好きだよ。」

驚いたさとしを見て、少女はにっこりとほほえんだ。さとしはその顔を見たとき、「キュン」とむねがしめつけられるような、不思議な痛みを感じた。さとしは、なぜか立ち上がった。少女から十歩ほどはなれた場所に座ったが、少しして少女に失礼だったかなと思ひ、あせるように少女のそばに戻った。

「あなたははずかしがり屋さんなんですわね。」

「僕の心の中が分かるのかな。不思議な子だな。」と、さとしは思った。

それから二人は、一日で変わる海の色や表情、海の恵みなどについて話をした。少女はきれいな海をいつもながめるのが好きなのだ、うれしそうに話した。魚をつることなんか忘れて、夕日になるまで語り合った。

夕日がちょうど水平線にすみかけたころ、少女はあわてたように言った。

「あ、もう帰らないと。バイバイ。」

突然のことだった。さとしはもつと話したかった。少女もそうだったはず――。

翌日、さとしは今までで一番早く白灯台へ向かった。少女はすでに同じ場所に座っていた。となりに座ると、早速さとしは、準備していた質問をした。

「そういえば、君の名前を聞いていなかったね。」

すると少女は、昨日は一度も見せることのなかった悲しそうな顔をして、こう言った。

「わたしには、名前がないの。」

名前がない——。さとしはその意味が分からなかったが、とっさに声が出てきた。

「うみ。」

「うみって、何のこと。」

「君の名前だよ。だって、毎日きれいな海をながめて、うれしそうにしてるでしょう。だから、うみ。」

「ありがとう。」

さとしとうみは、それから二週間ほど毎日会って話をした。うみは、きまつて夕日が水平線にしずむちよっと前に帰るのだった。

ある日のこと。さとしがいつまでも白灯台に来ないことがあった。心配になったうみは、昼前にさとしの住んでいる集落に向かって歩き出した。すると、山を越えたあたりで道の脇にうつぶせに倒れたさとしを見つけた。

「さとし。どうしたの。大丈夫。」

返事がない。おでこをさわると、火が燃えたように熱い。大変だ。うみはさとしをおんぶして、引きずるように坂を下った。途中で会ったおばあさんと一緒にさとしの家に運んだ。気を失ったままのさとし。いつも帰るはずの夕日がしずむ前の時刻になっても、うみはさとしのそば

をはなれようとはしなかった。

翌朝、朝の光が差し込んできたころ、さとしの意識が戻った。うみが泣いていた。さとしは、か細い声でうみに言った。

「君がここまで。家に帰らなかったの。」

「いいの。でも、戻らないといけないの。」

「戻る。家はどこなの。」

「家は……。さとし。これまでありがとう。うみって名前、大切にするね。いつまでもきれいな海を見ていてね。ありがとう。」

うみはそう言うのと、両手でさとしの右手をギュッと握りしめ、消えるように立ち去った。さとしはうみの言葉を不思議に思ったが、意識が遠のいて、また眠りについてしまった。

翌日、さとしは、あの白灯台に向かった。うみはいなかった。太陽が真上に来ても、夕日で白灯台がオレンジ色になっても、うみは来なかった。さとしは思った。僕が倒れたとき、日がしずむまでに帰らなかったせいで来られなくなったのでは。うみは、この広くてきれいな海を守る妖精だったのかもしれない。

うみが帰っていた夕焼けの時間。キラキラと輝く海と、うみのあのほほえみが重なった。

「うみ。君が大切にしてほしいと願っていたこの海を、

僕はしっかりと守れる大人になるよ。毎日、この白灯台に会いに来るね。」